

同窓会に関わること

——卒業後の男女別学経験のライフヒストリーの検討——

一橋大学大学院 徳安慧一

【1. 目的】

本報告は、同窓会に関わる諸個人の経験への主体的な意味づけの検討を通じて、「教育とジェンダー」の問題を、諸個人の生全体を射程に捉えたジェンダー形成やジェンダー平等の問題へとつなげていく研究枠組みを開拓する試みである。そのために、男女別学高校の同窓会をめぐる経験的研究から、学校卒業後の諸個人のライフヒストリーとジェンダー平等の問題としての男女別学・共学との接合を図ることが本報告の目的である。別学校の同窓会は共学化反対の主要アクターのひとつとして注目される（亀田編 2004）一方、組織集団としての性質や同窓生個人にとっての意味づけはほとんど問われず一枚岩的に把握されてきた。黄順姫（2007）は、同窓会が学校文化を再生産するメカニズムを捉え、過去の学校の記憶や学校文化を共有することによる「再帰的社会化」や、社会関係資本としての同窓会ネットワークの形成および選挙などにおけるその活用を指摘している。こうした分析は特定の文化様式を持つ組織集団の図式的理解を同窓会という具体例から促進する一方、同窓会を諸個人の生全体を射程に捉えたジェンダー形成やジェンダー平等の問題にはうまく接続できていない。

同窓会は社会老年学でいうところの活動の単なる機能的代替物や離脱の表れでもなければ、同窓会に対する個々の意味づけに必ずしも共通理解があるわけでもない。では、同窓会は諸個人の生全体を射程に捉えたジェンダー形成やジェンダー平等の問題を問う上でどのように重要な対象たりうるのだろうか。

【2. 方法】

以上から、本報告では公立男女別学校同窓会員によるライフヒストリーをデータとして取り上げる。本報告では、ライフヒストリーという個人の文脈に着目し、同窓会をめぐる経験の語りを分析する。具体的には、各役員同窓会役員会への参加経緯と運営方針、各人の同窓会（活動）への意味づけを中心に分析する。

【3. 結果】

分析の結果、まず、男子校と女子校では同窓会へ役員として参与するパターンが異なるケースが見出された。運営面では、男子校の同窓会においては、内輪での旧交を温める志向性とより対外的な活動の志向性の間で、運営方針をめぐる役員内の差異が見出された。また、会としての資金力・動員力はあるものの実務の進みが遅いことへの不満も語られた。一方で、世代間の相違は「体育会的」などタテ社会的な傾向は見られる一方、運営の志向などは結びつけられていなかった。女子校の同窓会においては、世代間でのライフコースの相違が、会の運営方針をめぐる志向性の違いと結びつけられて語られた一方で、上の世代をロールモデルと見なす語りも散見された。また、男子校に比して会の資金力に乏しいことから活動内容が限定されることや、世代が下るにつれての会の規模縮小への危機感が語られた。

【4. 結論】

共学化をめぐる文脈において、同窓会は男女別学校間の共学化反対の共犯関係を取り結ぶ組織集団である一方、各々の内実には男女のジェンダー差を反映した論理の違いが見出される。また、個々人の同窓会への意味づけもジェンダー差を反映している。こうした差異が同窓会の持つ共犯関係を崩す端緒となりうるか、はたまたなぜなりえていないのかが、ジェンダー平等を問う上で今後検討していくべき課題である。